＼知っておきたい入試制度、受験対策、勉強法etc.／

医学部合格までの道筋

医学部入試は難易度が高いうえに、独特の仕組みやルールが存在する。
正確な情報を得ないと、努力の方向性を間違えてしまう危険も。医学部合格までの道筋を解説する。

医学部受験 富士学院
学院長 村田慎一さん

毎年多数の医学部合格者が輩出する富士学院で学院長を務める。全国の高校や媒体から依頼を受け、医学部受験に関する講演を行い、高評を得ている。

医学部専門予備校 クエスト
代表 長原正和さん

長年、医学部受験に携わり、その豊富な経験から受験生に親身な指導をしている。塾生一人ひとりに対して現状分析やアドバイスを行う面談には定評がある。

STEP 1 医学部受験の「基本」を知る

医学部受験の難しさを知る

医学部医学科を設置する大学は全国で82校に限られる。定員も1学年100人程度の大学がほとんどで、全国から学力上位層が集まるため、競争は非常に激しい。そのため、合格するには高得点が必要で、偏差値帯が比較的低い医学部であっても、多くの場合、他学部の難関大学に匹敵する学力が求められる。大学によって倍率は大きく異なるが、私立大学では20倍を超えることもある。浪人生の割合が高い大学も少なくない。

「**医学部受験がきついのは、全体の要求点数が高いゆえに、不得意科目から逃れられないところ**です。苦手な科目の最低ラインをいかに上げられるか、そのためにどれだけ計画的に学習できるかが大切になります」（長原さん）

「**高い学力に加え、人物評価が重視される点も医学部受験の難しいところ**です。科目試験では合格最低点を上回ったのに、面接で不合格になる受験生が一定数います。医学部に入るとは、医師になるということ。適性が見られるのです」（村田さん）

文／石村紀子　イラスト／ぷーたく

国公立大と私立大の違いを知る

医学部受験は、**国公立大と私立大で仕組みが大きく異なる**。国公立大は、大学入学共通テスト（原則として６教科８科目相当）と２次試験（個別学力検査）の合計点で合否が決まる。**チャンスは前期・後期の最大２回で、それぞれ１校しか受験できない**。学費は、国立大は文部科学省が定める標準額に基づき、公立大もこれに準じるため、６年間で約350万円と安い。私立大は、独自の個別試験（おもに３教科）で受験でき、試験日程が異なれば、いくつもの大学を併願できる。ただし、**学費は６年間で約2000万～4000万円と非常に高額**なため、事前の資金計画や奨学金利用の有無、修学資金制度が利用できる地域枠での受験を検討しておく必要がある。

医学部ならではの試験のポイントを押さえる

国公立大で気をつけなければならないものの一つが配点比率だ。大学によって、共通テストの点数を重視する「２次試験での逆転が難しい大学」と、２次試験の配点が高い「記述力次第で逆転可能な大学」があるからだ。また、特定の科目の点数を0.5倍や２倍等にする「傾斜配点」を採用している大学もある。**「自分の得意・不得意と大学の問題相性を確認しないと、苦戦します。**また、共通テストで一定の基準を満たさないと、２次試験すら受けられない『足切り（第１段階選抜）』についても考えておかなくてはいけません。共通テストを終えた後でないと出願校が決められないのが、国公立大の難しいところです。共通テストが想定通りにできた場合、できなかった場合のどちらでも対応できるよう、相性のよい大学をあらかじめ選定しておくといいでしょう」（村田さん）

一方、**私立大の入試問題は、強烈な個性が特徴だ。大学ごとの特徴が強く表れた問題が出題される上に、解答時間に対する問題量も非常に多い。見た瞬間に解法を思い浮かべて正確に処理する能力が求められる。**科目数が少ないため、一つのケアレスミスが命取りになることも少なくない。

「医療系の超専門的な英単語が頻出したり、マニアックな難問が出たりと、大学ごとに強い特徴があります。そのため、偏差値が低くても相性が悪い大学だと、合格はかなり難しくなります。大学のブランドや理想に惑わされず、自分が受かりやすい大学を見極めることが必要です」（長原さん）

医学部特有の入試制度「地域枠」を理解する

地域枠とは、将来、「その地域の医療を支える医師になること」を条件に、一般枠とは別枠で受験できる入試制度のことだ。一般選抜だけでなく、学校推薦型選抜と総合型選抜でも実施されている。一般枠に比べて倍率や合格最低点が低くなる傾向にあり、月額15万～20万円程度（6年間で総額1000万～1500万円規模）の手厚い修学資金が貸与されるため、経済的な不安がある人は利用を検討してもいい制度だ。

ただし、**この制度で入学すると、卒業後、指定された病院や医師不足の地域の病院で、大学・自治体が定めた一定期間（一般的に9年間が多い）勤務する義務が課せられる。**義務を果たせば、修学資金の返還は全額免除されるが、離脱した場合は修学資金を利子付きで一括返還しなければならない。

「医師になってからの進路に制限が出るので、利用する際は慎重に検討するようにしてください」（長原さん）

医学部の推薦入試について知る

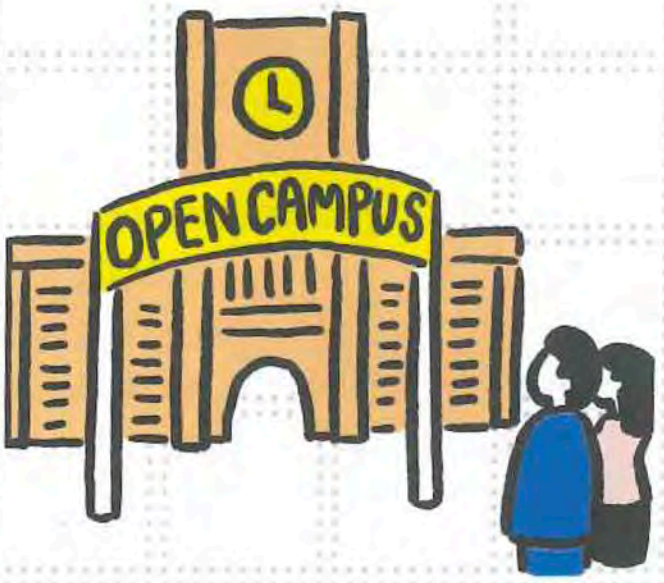
医学部にも学校推薦型選抜と総合型選抜はあり、徐々に枠が増えている。学校推薦型選抜は、高校の校長からの推薦が必要で、現役生と1浪生を対象にしているものが多い。評定平均は国公立大の場合、4.3以上が目安。高校からの推薦人数も決まっているので、まずは学内選考を勝ち抜く必要がある。

総合型選抜は、評定平均よりも医師になりたい熱意や、特殊な実績（科学オリンピック、語学など）が重視される。2浪以上や再受験生でも受けられる大学があり、高校ごとの人数制限はない。どちらも**面接、小論文に加え、共通テストや大学個別の試験を受けるのが一般的だ。**倍率は2～4倍程度のことが多いが、地域枠としての募集が多いため、利用する際は注意が必要だ。いずれも合格したら必ず入学することがルールだ。

「**推薦入試とはいえ、医学部の場合は不合格になる場合もよくあります。推薦入試一本に絞るのは危険**です。一般入試にも挑めるよう、学力をつける努力は怠らないでください」（村田さん）

オープンキャンパスに行くメリット

オープンキャンパスに行くメリットは、大学の雰囲気や学生の様子を肌で感じ、各種展示を通して医学への理解を深められる点にある。面接時に志望度の高さを伝えるアピール材料にもなるし、「この大学で学びたい」というモチベーションにもつながる。そのため、できるだけ早い時期に（学習に比較的余裕のある高校2年生までが理想的）、参加しておくといい。



STEP 2

合格を引き寄せる「勉強」を知る

受験期前に やっておくべき 準備を知る

医学部受験の勝負は、高校３年から始まるわけではない。合格を左右する土台は、中学・高校時代の学習習慣や生活習慣の中で少しずつ築かれていく。まず大切なのは、学校の授業を大事にすることだ。授業は知識を教わるだけの場ではなく、各科目の基本的な考え方や解き方を身につける場でもある。

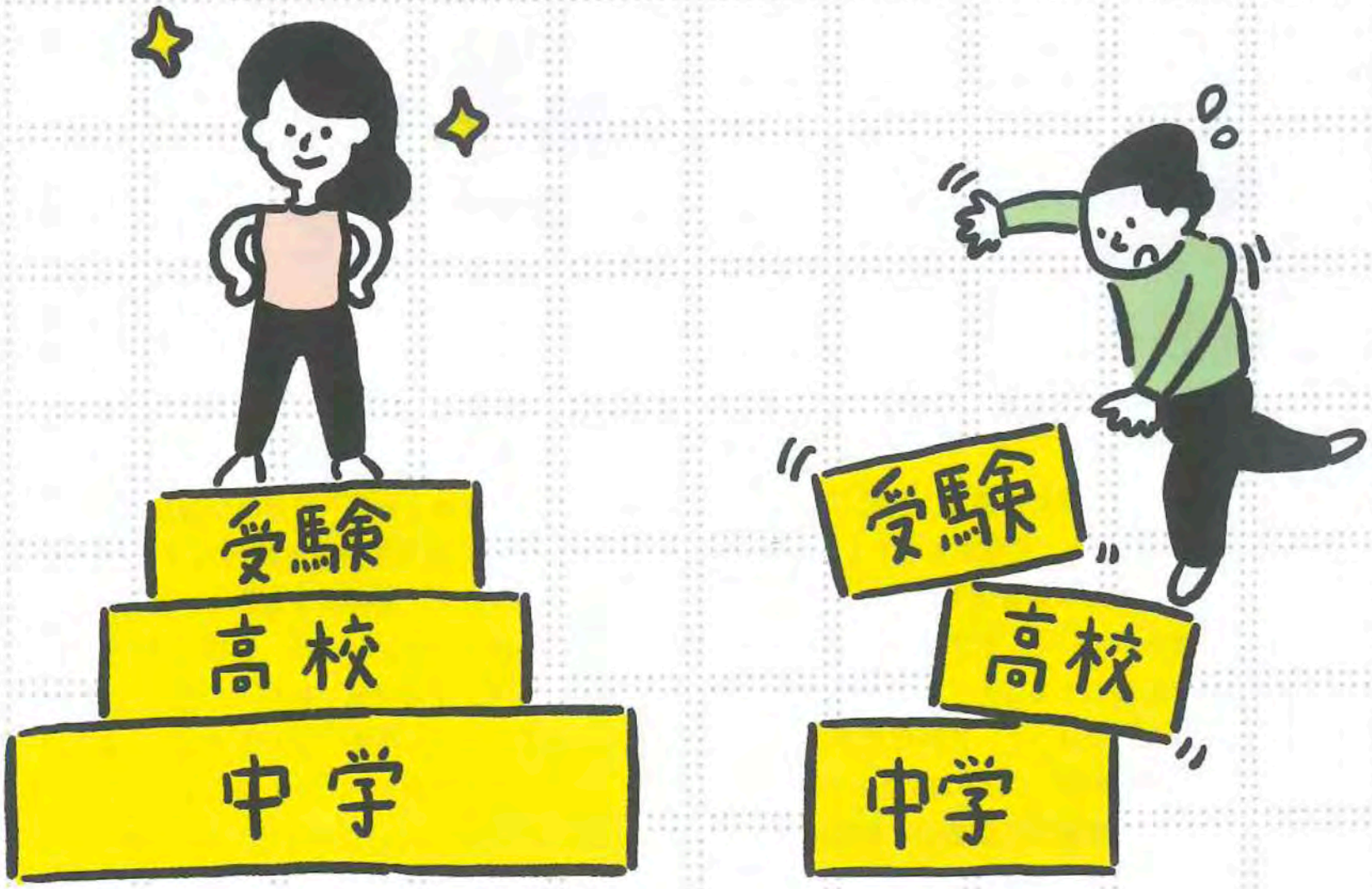
「**学校の授業は、復習として活用するのがおすすめ**です。予習で大枠を押さえ、授業で確認すれば、より理解が深まります。入試で出てくる応用問題を解くには、土台となる圧倒的な知識量が必要です。まずは中学・高校の教科書に載っている基本事項をもれなく覚え、定着させることから始めましょう。そうして**基礎をしっかり固めておけば、受験勉強を始めたときに大きな武器になります**」（長原さん）

「何のために勉強するのか」という目的を明確に持つことも重要だ。ただ成績を上げるためではなく、「医師になるため」という目標を意識すれば、日々の勉強への向き合い方は大きく変わる。

「この勉強が医師になることにつながっていると強く意識すれば、日々の学習にも気迫が生まれ、記憶の定着率も格段に上がります。定期テストでは高得点を取れるけれど内容を深く理解していない人は、定期テストのためだけの浅い学習理解で終わっている場合があります。日々の授業で触れる内容は、暗記を含めた知識理解から、その知識を基に応用できる力を養うものです。そのことが受験で問われる問題の中心になり、さらに将来患者さんを救うための大切な知識の土台となっていきます」（村田さん）

規則正しい生活習慣を身につけることも重要だ。十分な睡眠と整った生活リズムは、集中力や記憶力を高め、勉強の効率を大きく上げる。受験期になってから慌てて生活を改めるのではなく、今から習慣化しておきたい。

さらに、医学部が評価するのは学力だけではない。医師としてふさわしい人間性も重要な評価対象となる。部活動や学校行事、ボランティア活動などを通して多くの人と関わり、多様な価値観に触れる経験をできるだけ積んで、豊かな人間性を育もう。



中学・高校低学年の勉強で気をつけるポイント

医学部を目指すなら、高校３年生になってから本格的に受験勉強を始めるのでは遅い。**理想は、高校２年生までに高校３年間の学習範囲を一通り終え、高校３年生では演習や過去問対策に十分な時間を確保すること**だ。特に現役生は理科の全範囲が終わるのが遅くなりがちなため、早期の先取り学習が浪人生との差を埋める鍵となる。近年は共通テストに「情報」が加わり、数学Ｂ・Ｃなど学習範囲も広がっている。

「受験で求められる知識は年々増えています。今後も増える一方でしょう。だからこそ、**早い段階から計画的に学習を進めることが、合格への大きなアドバンテージとなります**」（長原さん）

その土台となるのが、毎日の予習・復習だ。新しく学ぶ内容はあらかじめ確認しておき、授業では理解を深めることに集中する。そのうえで授業後に復習すれば、知識は長期記憶として定着しやすくなる。

「**医学部受験では、原理原則の理解と基礎がとても大切**です。ただ公式や解法を暗記するのではなく、なぜこの考え方になるのか、どのように解けばよいのかといった、各科目の基本的な考え方を理解することに重きを置いてください。**自分で考えながら学ぶ習慣が、難関大レベルの問題にも対応できる力を育ててくれる**のです」（村田さん）

また、定期テストで高得点を取れたからといって安心してはいけない。定期テストは限られた範囲から出題されるが、医学部入試では高校３年間の学習内容すべてが試験範囲となる。入試本番では、膨大な問題を制限時間内に正確に処理するスピードも不可欠だ。テストが終わった後も繰り返し復習し、「覚えたつもり」をなくし、すぐに答えが引き出せるよう準備しておくことが大切だ。

医学部入試では、**どの科目でも高い得点が求められる。そのため、苦手科目を後回しにするのは禁物**だ。特に英語と数学は習得に時間がかかり、出題範囲も広い。毎日少しずつ積み重ねていくようにしよう。

浪人生との差を縮める勉強法

現役生は長く受験勉強をしている浪人生より不利とされるが、計画的に学習を進めれば十分に合格を目指せる。

「**試験は確率論です。できるだけ多くの問題に触れ、演習をしたほうが知っている問題に出合う確率は高まります**。現役生は先取り学習を心掛け、演習のための時間を十分に確保できるよう学習計画を立ててください」（村田さん）

「**現役生と浪人生で点数差がつきやすいのは理科**です。特に公立高校では、全範囲が終わるのが入試直前になることや、英数の勉強優先で手が回らないことなどが原因として挙げられます。十分な演習時間を取るためにも、前倒しで学習計画を組みましょう」（長原さん）

医学部受験では浪人生も少なくない。一般的に多浪とされるのは３浪からだ。浪人生の場合、面接で浪人期間の過ごし方や、その経験から得たことなどを聞かれる場合もある。自分の経験を前向きに、かつ具体的に説明できるよう準備しておこう。

STEP 3

合格に近づく「戦略」を知る

自分に合った大学を選ぶコツを知る

医学部受験では、偏差値通りの大学には不合格だったのに、それより格上の大学には合格できたという逆転劇は、めずらしいことではない。

「医学部の試験問題は、配点比率や出題傾向、問題の特徴などが大学ごとに大きく異なります。つまり、**相性のいい大学を受ければ合格の可能性を大きく高めることができる**のです」（村田さん）

英語の配点が高い、理科の比率が大きいなど、自分の強みが生かせる配点の大学を見極めたり、スピード勝負の「マーク式」と、じっくり考える「記述式」のどちらが得点しやすいかなどを確認したり、**過去問を通して相性を確かめる受験戦略こそが、合否の分かれ目**となる。

「どうしてもこの大学に行きたいと固執する受験生もいますが、どの大学に行っても医学部ならば医師は目指せます。最終的な目的を見誤らないように大学を選ぶのも戦略のひとつです」（長原さん）

国公立大の場合は、共通テストと２次試験の配点に着目しよう。共通テストで高得点が取れたら「共テ逃げ切り型」の大学、思ったほど点数が伸びなかった場合は記述力で巻き返せる「2次逆転型」の大学を選ぶなど、状況に応じた出願校選びが勝敗を左右する。

このように医学部受験は偏差値よりも、その大学の入試パズルに自分のピースがハマるかが重要だと言える。つまり**医学部受験は情報戦。より優れた戦略を立てられた人こそが、合格を勝ち取ることができる**のだ。

得点力を伸ばす大学別の対策を練る

医学部入試を突破するには、志望校の出題傾向の攻略が欠かせない。共通テストと２次試験（個別試験）では求められる力が大きく異なるし、私立大では大学ごとの個性が色濃く表れる。

問題数が多い共通テストでは、正確に解き切るスピードと処理能力が求められる。普段から時間を計って演習を重ね、処理能力を高めておく必要がある。一方、国公立大の２次試験や私立大の個別試験では、より深い思考力や記述力が必須だ。

「**同じ医学部入試でも記述重視、計算力や思考力重視など特徴が異なるため、大学ごとの対策が必要**です。カギとなるのは過去問です。基礎学力がついてから取り組むのが一般的ですが、受験勉強を始める前に一度目を通し、最終的なゴールを知っておくことも目標を明確にするうえで大きな意味があるでしょう」（長原さん）

過去問はいわば「大学からのラブレター」。そこには大学が求める受験生像が詰まっている。志望校の過去問に触れることで、解きやすさなど、自分との相性も見えてくるはずだ。遅くとも高校３年生の夏頃からは本格的に取り組みたい。

また、**医学部入試では得意科目で飛び抜けるより、苦手科目で大きく失点しないことが重要**だ。受験生同士のレベルが高いため、誰もが解ける問題を確実に得点できるかが合否を左右する。苦手科目から目を背けず一つひとつ穴を埋めていくことが、合格への最短ルートといえる。

面接・小論文の対策を練る

人物評価の重要性が高まっている医学部入試。面接は「医師としての適性」を見極める重要な試験だ。十分な準備をして臨みたい。

近年は試験形式も変化している。従来の個人面接に加え、集団討論やMMI（マルチプル・ミニ・インタビュー）を導入する大学も増えており、思考力や倫理観、コミュニケーション能力などが多面的に評価される。

志望動機や理想の医師像、自分の長所・短所といった定番の質問は、事前に内容を整理しておけば落ち着いて答えられるが、医療現場でのジレンマや社会問題を題材に、「あなたならどう考えるか」を問われる課題解決型（SJT）の面接は、明確な正解がないため一筋縄ではいかない。

「**大切なのは、自分の考えを論理的にまとめ、相手にわかりやすく伝える力**です。付け焼き刃では太刀打ちできないので、日頃から新聞やニュースに目を通し、医療制度や生命倫理、地域医療など、医療を取り巻く社会課題について自分なりの考えを持つ習慣をつけましょう。その積み重ねが、面接で自分の言葉として自然に語る力につながります」（村田さん）

また、こうした医療倫理や社会問題は小論文でも頻出のテーマだ。学科の勉強が優先となるため、小論文の演習は後回しになりがちだが、自分の考えを筋道立ててまとめ、限られた時間の中で論理的な文章を書く練習も、早いうちから始めておくことが大切だ。

予備校を上手に活用する

予備校は、医学部合格を目指す受験生にとって心強い存在だ。**大きく分けると、大手予備校と医学部専門予備校があり、それぞれに異なる強みがある。**自分の学力や学習スタイルに合った環境を選ぶことが、合格への近道となる。

大手予備校は、必要な教科がまんべんなくシステマチックに組まれているのが特徴だ。有名講師も在籍していることが多く、学費も比較的抑えられている。ただしクラスの人数は多く、個別のサポートはそこまで手厚くない。**自ら学習計画を立て、進捗を管理し、弱点を分析しながら勉強を進められる人に向いている。**

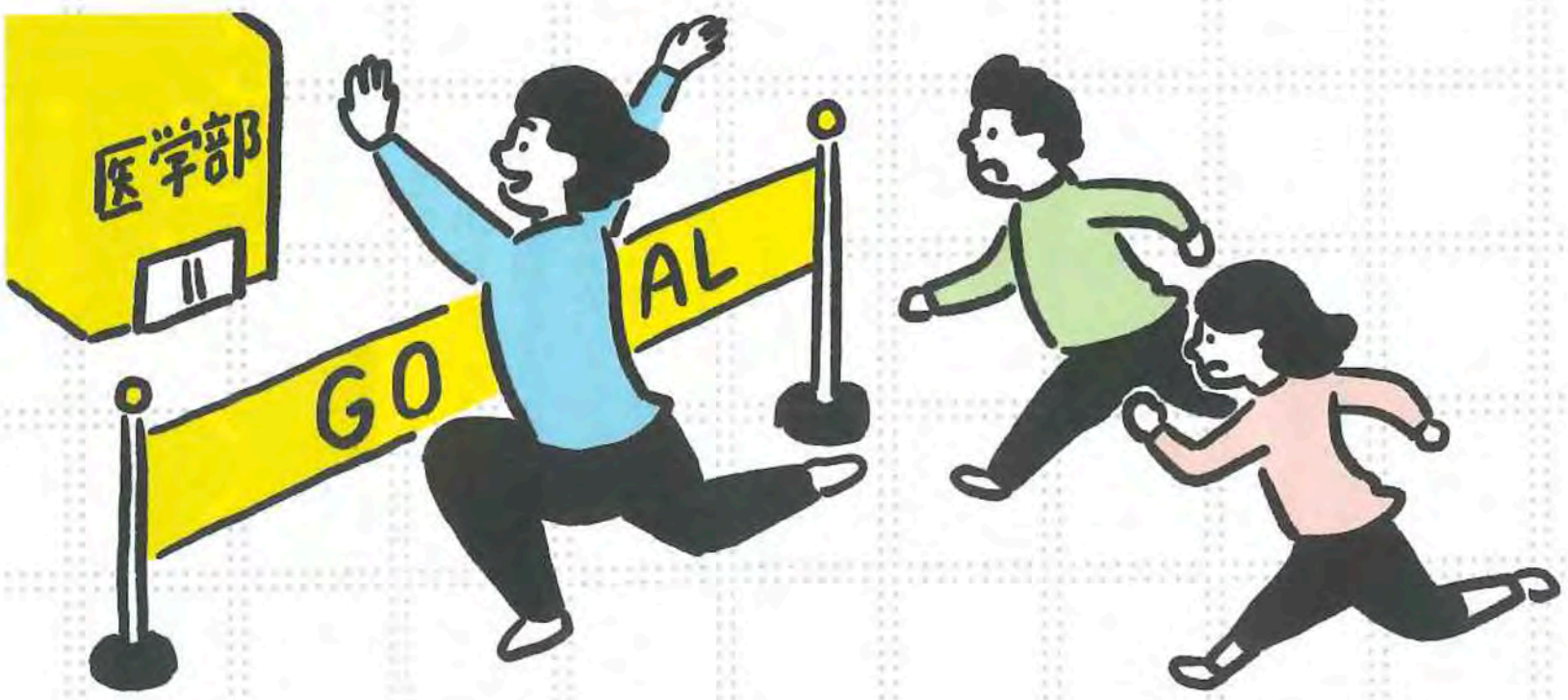
一方、**医学部専門予備校は、医学部入試に特化した圧倒的な情報量と指導力が強み**だ。大学ごとの出題傾向や面接・小論文対策はもちろん、生徒一人ひとりに合わせたサポートが充実している。個別の学習計画を作成し、受験本番まで伴走してくれるため、学習のペースやモチベーションを維持しやすいのも大きなメリットといえる。

ただし、評判のよい予備校であっても、自分との相性が合わなければ十分な成果は期待できない。

「講師陣や実績、学習環境など、チェックすべきポイントはいろいろありますが、実際に入ってみなければわからないことも少なくありません。**入校前の面談では、ぜひ『どのような信念を持って受講生と向き合っていますか』と聞いてみてください。**その答えに信頼できるものを感じ、『ここなら自分の未来を託せる』と思えたら、その予備校選びは成功すると思います」（長原さん）

医学部受験は情報戦。入校したら、予備校が持っている情報やサポートを最大限に活用しよう。特に医学部専門予備校では、出願校を決める際、受講生一人ひとりの学力や志望、性格などを踏まえ、全国の医学部との相性を細かく検証してもらえる機会がある。長年蓄積してきたデータと、医学部受験を数多く見てきた経験があるからこそ、一人ひとりに合ったアドバイスができると言える。これは、医学部専門予備校ならではの大きなメリットだ。

「**大切なのは、それらの言葉を素直に受け止め、行動に移す姿勢**です。伸びる生徒には共通点があります。それは、周囲への感謝の気持ちを持っていることです。多くの人の支えがあって努力できていると理解している人は、アドバイスに耳を傾け、前向きに、粘り強く取り組むことができます。それは、将来医師になるうえでも大切な資質の一つです」（村田さん）



医学部予備校 富士学院

高止まりが続く医学部受験
定員減少時代を控え
総合力の強化が不可欠に

医学部受験では、募集人員や志願者数、合格者数の増減などに注目が集まるが、そうした数字の裏にどんな動きがあるのだろうか。医学部専門予備校として大学医学部や全国の進学校から厚い信頼を寄せられている富士学院。その学院長である村田慎一氏に、現在の医学部受験の実態と、合格に向けてのアドバイスを伺った。

依然として高い医師志望熱 仮面浪人や再受験も増加

▼今年度の医学部入試をどうご覧になりますか。

2026年度の医学部医学科入試は、国公立大学前期日程の志願者数が前年比94・9%※1と減少したものの、私立大学では増加し、全体としては微増傾向となりました。ただし、表面的な数字だけでは見えない変化もあります。たとえば、新課程入試2年目となる共通テストの志願者数は、全体で1066人増加しました。しかし内訳をみると、現役生が前年比98・7%と減少した一方、既卒生は同109・8%と増加しており、既卒生の志願者数が増えたことがわかります。

▼医学部志望でも浪人生が増えたということでしょうか。

医学部受験では、「予備校浪人」だけではなく、大学に在籍したまま再挑戦する「仮面浪人」も増えている印象です。明確な数字は示せませんが、相談に来られる方や、本校の生徒たちから話を聞いていると、そうした傾向を感じます。加えて、医学部以外の4年制大学を卒業してから医学部に挑戦する「再受験生」も増えてきています。

▼再受験生は学士編入を利用するのでしょうか。

学士編入制度のある大学は限られており、一般選抜での合格を目指し、大学1年からやり直す道を選ぶ受験生も少なくありません。それほど「医師になりたい」という思いが強いわけです。現役生の医学部人気も依然として高く、全国の高校で講演を行う中で、その熱量を肌で感じます。特に女子の志願者が増加している印象を受けますね。経済的な安定性と仕事のやりがい、この二つを背景に、医学部人気は高止まりの状況にあると言えます。

2027年度からは「定員減少時代」に突入

▼医学部の入学定員は今後どう変化していくのでしょうか。

2026年度入試の定員は前年度と同水準でしたが、2027年度入試からは医学部の入学定員が削減されることが既定路線です。現時点では、大学毎の細かな定員数は明らかになっていませんが、大きな方向性としては、「地域枠」を中心に進められてきた臨時定員の調整が進む見込みです。

▼基本となる定員（恒久定員）ではなく、地域枠から削減されていくのですか。

地域枠はもともと「医師不足の地域を支える」目的で設けられた臨時定員で、ここ十数年の医学部定員増の中心を担ってきました。しかし近年は医師の地域偏在が徐々に改善されつつあり、将来の人口動態や医療ニーズの推計などから、国としても「現在の定員規模を維持すべきか」という議論が進んでいます。もっとも、「都市部は減らし、地方は増やす」といった単純な話ではなく、各地域の実情に応じた調整が行われる見通しです。都市部で増員する大学もあれば、地方で減員する大学も出てくるでしょう。いずれにせよ、今後は医学部の定員が増える可能性は低く、定員が減少すれば競争は一層激化し、合格ラインも上がります。医学部受験は「定員増の時代」から「限られた枠をどう勝ち取るか」という側面がより一層強くなっていくと思います。

富士学院 学院長 村田 慎一

※1. 国公立大学前期日程試験における志願者数：2025年度15,307名、2026年度14,520名（富士学院独自の集計データによる）

(PR)

重要なのは「読解力」「処理力」「情報」科目にも要注意

▼今後の医学部受験ではどのような能力が求められるのでしょうか。

新課程入試への移行から2年経過しましたが、明らかになってきたのは「もはや暗記中心の学習だけでは通用しない」ということです。共通テストでは問題の長文化が顕著で、各大学の医学部入試でも同様の傾向が見られます。公式の暗記にとどまらず、文章を正確に読み解く力、必要な情報を整理する力、そして自ら考え抜く力が求められます。特に数学や理科では、難問が増えたというより、限られた時間内で処理すべき問題量が増えています。そのため、「解法は分かっていても時間が足りない」というケースが増加しています。こうした入試に対応するには、基礎力に加え、読解力・思考力・処理スピードといった「総合力」を底上げすることです。加えて、『情報』科目も見逃せません。導入当初は配点がない、あるいは比率の低い大学も多く、高校側でも軽視されがちでしたが、現在では配点の見直しが進み、無視できない存在となっています。指導環境にも若干の差があるようです。私立大学医学部の一般選抜で『情報』が課されるケースは今のところありませんが、共通テスト利用や国公立志望者は、入試科目としての意識をしっかり持ち、得点できる対策を始める必要があります。対策をした人、しなかった人で今後、差のつく教科の一つになるかもしれません。

医学部の出題傾向や問題難度は大学毎に異なる

▼医学部受験では、大学別の対策も重要になってくるのでしょうか。

医学部受験を難しくしている要因の一つが「大学毎の差」です。私立大学医学部では、出題傾向・難度・配点比率等々が大学毎に大きく異なります。「英語200点・数学100点・理科200点」の大学、「英語150点・理科200点」の大学、「4科目均等配点」の大学など、配点次第で学習バランスや受験戦略がまったく違ってくるため、一般的な模試の判定はあまり当てになりません。「A判定でも不合格」「E判定から逆転合格」も医学部受験では決して珍しくないのです。志望校によって出題傾向・配点・求められる力が異なるため、模試の偏差値だけで安易に合否を測ることはできません。

国公立大学でも、かつては共通テスト対策をしっかり行い、二次試験で高得点を取れば合格できましたが、近年は二次試験に医学部独自の問題を課す大学が増え、志望校に合わせた個別対策が必要不可欠になっています。当然、大学毎の目標は変わりますが、合格ラインとしては、国公立大学は共通テスト目標9割の得点率、私立の二次試験は7割、大学によっては5割程度で合格できる場合もあります。また、模試偏差値で見る合格ラインが高い大学ほど、問題の難度が高いとも限らないのです。ただし、国公立は受験科目数が多く、全科目で高得点を取る力が求められることと、学費が私立に比べてかなり安いことを含め、総合的に学力の高い層が集まる傾向があると思います。

医学部受験は医師になるための「就職試験」という意識を

▼医学部受験を目指す現役生と浪人生にそれぞれアドバイスをいただけますか。

現役生は「学校推薦型選抜」が重要な選択肢となります。大学入試全体で推薦型選抜の比率は高まっており、医学部でも推薦枠は年々増加傾向にあります。ただし国公立大学の場合、推薦枠の多くが評定平均4・3以上などの基準を設けていますので、高校1年時から定期テストを大切にし、評定を意識することが大切になってきます。「高校1年時からすでに医学部受験は始まっている」という感覚を持ってほしいですね。

出願条件も「現役生のみ」「一浪まで可」「二浪まで可」「年齢制限あり」など大学毎に大きく異なるため、早めの情報収集が大切です。浪人生は、推薦枠の増加で一般選抜枠が減少するなか、心理的な焦りだけでなく新課程入試への対応という重圧もあるでしょう。大切なのは「気持ちで負けない」ことです。医学部受験は長期戦なので、知識量だけでなく、精神的な粘り強さが問われます。自分に合った受験する大学の選定と現実的な戦略を立てること、そして不安に飲み込まれないモチベーションを維持することが大切です。

▼医学部を目指す上で、皆さんに伝えたいことを一言お願いします。

医学部受験は単なる大学受験ではなく、医師という職業を目指す「就職試験」です。そのため全大学で面接試験が課され、人間性も重視されています。医師に必要なのは学力だけではありません。社会に関心を持ち、課外活動を通じて、多様な価値観を理解しながら患者に寄り添える力を磨いてください。皆さんの夢が叶うことを心から願っています。そしてわからないことがあれば、何でも富士学院に相談に来てください。

医学部受験 富士学院
富士学院 検索
全て直営校で運営
東京御茶ノ水校：0120-01-9179
東京十条校：0120-02-9179
横浜校：0120-04-9179
名古屋校：0120-9816-33
京都校：0120-05-9179
大阪校：0120-06-9179
岡山校：0120-9179-00
広島校：0120-09-9179
福岡校：0120-5251-22
鹿児島校：0120-66-9179

(PR)